# 今泉潤太郎先生に聞く

## ――愛知大学入学から中日大辞典編纂処へ――

石田卓生

**要旨**　本稿は、愛知大学『中日大辞典』編纂に従事してこられた今泉潤太郎先生に、初期愛知大学の中国語教育を中心に聞き取り調査した内容をまとめたものである。

先生は、開学して間もない愛知大学に入学して中国語を学び、卒業後は母校の教員として中国に関する教学活動をすすめつつ、同時に『中日大辞典』編纂に尽力してこられた。つまり、愛知大学の中国語教育や研究の萌芽から成長、展開、変遷のすべてに、学生として、あるいは教員や学校スタッフとして関わってこられた方である。

愛知大学は開学して70年を経過し、前身校の一つである東亜同文書院を含めれば、すでに120年に迫る歴史をもっており、その中国研究、中でも最大の成果である『中日大辞典』編纂や、その背景にある愛知大学の中国語教育活動自体がすでに研究対象にされるべき時期に差しかかっていると考える。

本稿は、そうした愛知大学の中国語教育活動のはじまりについてのオーラルヒストリーである。

**キーワード**　東亜同文書院　愛知大学　中国語教育　『中日大辞典』『華語萃編』

### 今泉润太郎先生口述历史：
### 从爱知大学入学到开始从事《中日大辞典》编纂事业

**提要**　本文是今泉润太郎先生的口述历史。今泉先生现为爱知大学名誉教授，1932年生，籍贯爱知县丰桥市，1951年入学爱知大学文学系，1955年毕业后在母校任教，曾担任《中日大辞典》编纂处编辑委员长、东亚同文书院大学纪

念中心负责人、现代中国学系系主任，在爱知大学从事汉语教育和研究活动前后近50年。今泉先生在学术上，尤其在词典学和词汇学方面取得了很多杰出的成就。任职《中日大辞典》总编辑期间，出版了《中日大辞典》第二版、增订第二版和第三版。对于爱知大学的汉语教育和研究历程，今泉先生既是当事者也是见证者。

**关键词**　东亚同文书院　爱知大学　汉语教育　《中日大辞典》《华语萃编》

## 今泉潤太郎先生略歴

1932年（昭和７）　愛知県豊橋市生まれ
1945年（昭和20）　愛知県豊橋中学入学
1948年（昭和23）　愛知県立豊橋高等学校（愛知県立豊橋時習館高等学校、現愛知県立時習館高等学校）入学
1951年（昭和26）　愛知大学文学部入学
1955年（昭和30）　同卒業、華日大辞典編纂処勤務
1956年（昭和31）　愛知大学文学部副手
1958年（昭和33）　愛知大学文学部助手
1959年（昭和34）　愛知大学教養部専任講師（中国語担当）
　　その後、同教授、愛知大学現代中国学部教授
1975年（昭和50）　中日大辞典編纂処編集委員長
1993年（平成５）　愛知大学東亜同文書院大学記念センターセンター長
2000年（平成12）　愛知大学現代中国学部学部長
2003年（平成15）　愛知大学名誉教授　中日大辞典編纂所編集主幹

図１　今泉潤太郎先生
2017年12月14日撮影
於東亜同文書院大学記念センター

## 1．中国語との出会いと愛知大学入学

今泉　敗戦の翌年昭和21年（1946）に旧制の愛知大学が豊橋にできました。ぼくは昭和26年（1951）に時習館高校を卒業し、新制大学になった愛知大学の第3期生として入りました。

時習館は進学校だったけれど、ぼくはサッカーばかりしていたから、学力に自信はなかったし、お金のこともあるし、進学は難しいと思っていました。あの頃、豊橋の人にとっての大学というのは、東京や京都、大阪の国立でした。名古屋にも大学はあったけれど、名古屋大学や名古屋工業大学のような理工系が中心でした。そういうことで、大学に進学できるとは思っていなかったのです。そうしたら愛知大学が豊橋に来たので、それならばと入ったわけです。愛知大学の入試は易しかったですよ。時習館なら、試験を受ければ、だいたい入ることができたのではないですかね。そんな感じで入学したのですけれど、愛知大学に入ることと中国語を学ぶことは、ぼくの中ではすでにイコールになっていました。

実家は豊橋の空襲で焼け残り、おやじが製糸工場をやっていて、実家の建物の部屋数は結構あったのですよ。そこに旧制愛大の学生さん2、3人を下宿させていたんです。かれらはみんな上海の東亜同文書院からの引揚者で、下宿つまりぼくの家で、

「喫飯去了」（めしを喰いにいった）

「今天沒有課」（今日は講義はない）

「到外邊兒去玩兒」（外へ出て行こう）

と中国語をしゃべっていたのね。ちょうど『華語萃編』[1]初集くらいの中国語でしたよ。それで、あれが中国語というものか、という新鮮な感じがあったし、愛大は中国からの引揚者の学校なのだと思いましたね。

石田　それが中国語の原体験なのですね。

今泉　そう。それが入学したきっかけだと思う。

---

1）東亜同文書院で作成、使用された中国語会話テキスト。

図２　愛知大学正門（現豊橋キャンパス正門）
2017年12月７日撮影

それから英語ができなかったというか、勉強しなかったということもありました。英語をちょっと白眼視していたんですね。これは個人的なことではなくて、ぼくらの学年に共通することです。中学入学が敗戦の年だったから軍国少年ですよ。

豊橋中学の入試で今でも覚えているのは、一番大事だといわれた口頭試問です。何をするかというと、歴代天皇の御名を神武以来今上までいうんですよ。今上まで全部いうのは大変だけれど、神武、綏靖、安寧、懿徳、孝昭、孝安、孝霊、孝元から30代や40代ぐらいまでいえるとだいたい中学に入ることができる、という嘘か真（まこと）かわからない話があったんです。

ぼくの時は口頭試問の日に空襲がありました。空襲警戒警報では学校に行くのだけれど、空襲警報が発令されたら即時帰宅なんです。入試当日は空襲警報発令中だったんですよ。それで入試がなくて、ぼくらは内申だけで入学した。内申というのは各小学校で３人とか５人とかの枠をもっていて、それに入ることができれば、よほどのことがない限り受かるんです。

空襲があって入試なしで入ったのだけれど、先生に、

「お前たちは、この学校始まって以来の不名誉な存在だ」

といわれた。入試をやらずに入ったなんて恥だとか、前代未聞だ、とかいわれたのです。

当時は統制経済でしたから、英和辞典だって自由には買えません。配給制で、チケットをもらって駅前の本屋で交換しました。そうするとインクの匂いがして、いかにも中学生になったな、という感じがしましたよ。ぼくらはローマ字を小学校でやらなかったから、初めて見るものにわくわくしたんです。

ところが、英語の時間になると、お前たちは恥だ、といったのと英語の先生は同じだったと思うんだけれど、そのかれが、

「これからは英語はいらない。お前たちがワシントンとかニューヨークに行った時には日本語でアメリカ人に命令するのだから」

というんだ。それで4月に入学してから8月まで、ほとんど英語らしい英語の授業なんて受けていないんですよ。

ところが8月15日で一変してしまって、英語の先生がやりにくそうに「Hello」とか教えたものだから、何だこれは、と反感をもちました。それにアメリカの兵隊が進駐して来ると、日本人の女性を連れてチョコレートやキャンディーをいっぱいばらまく。ぼくらはもう中学生だったから、そういうのを横目で見てましたけど、そういうのがあったものだから、なおさら抵抗感がありました。だから、英語は勉強しようという気にならなかった。

そんなこともあって、残った選択肢が愛知大学だったのです。そして愛知大学イコール中国語なんです。愛大の中でも、まだ中国専門のコースなんてありませんでしたから、唯一中国語を4年間ずっとやれるのが中国文学専攻だったのですよ。

石田　では、中国語が入学目的だったのですか。

今泉　文学にもやはり興味はありましたが、ただそれは中国文学ではないです。敗戦直後のあの頃、魯迅だっていまのように有名ではありませんでした。友人に、後に農民文学賞とかいうのを受賞したのがいて、そういったのと文学サークルをもっていて、下手な詩とか、文章とか、童話だとかを発表していましたから、多少は文学っ気があったんですよ。

そういう文学青年みたいなのは、みなというわけではないですけど、特にリーダー格はだいたい社会主義っていうか、マルクス・レーニン主義っていうか、そういう傾向がありました。サークルのリーダーだったぼくの親友は、正式ではないにしても共産党につながっていました。ぼくらは、そういう連中のさらに外側にいたのです。

石田　それは高校生の時ですか。

今泉　噂では、中学の時に細胞（組織）に入ったのもおりました。友人で共

産党の党員だというのもいました。かれらは、愛大は豊橋の左翼活動の中心で、学生寮で会合があって、そこに出入りしたことがあるっていっていましたよ。

石田　ご自宅に下宿していた愛知大学の学生と、左翼活動の話や愛知大学への進学についてお話をされたことはありますか。

今泉　下宿していた 5 人のうち、 3 人までは名前がわかるけれど、みなさん真面目な人ですよ。ごく普通の学生さんでしたね。卒業後の就職先や交友関係を見ても左の人ではないね。大学進学について、かれらと話したことはなかったです。

## 2．当時の愛知大学の様子

石田　下宿していた学生がしゃべっていたことから、中国語イコール愛知大学というイメージがあったとのことですが、当時、豊橋の一般の人からはどのように愛知大学は見られていたのでしょうか。

今泉　愛知大学には京城帝国大学や台北帝国大学などからも先生がいらしていた。みなさん帝国大学教授、つまり勅任官という“偉い人”なわけです。それが何人も豊橋に来たというので、先生方は素晴らしいと見られていました。そういう先生が、昭和23、24年（1948、1949）に名古屋大学が法学部、経済学部をつくる時に全員引き抜かれるのだけれども、それくらい愛大の先生はすごいのだ、と世間に認められていました。

図 3　1960年代の教室棟（現豊橋図書館南）
中内康博氏撮影

ただ、学生はあまり入って来ない。それは大

学というには、あまりにみすぼらしかったからです。さっきもいったけど、当時、大学といえば東京とか大阪の方、例えば東大の赤門のイメージですから、愛知大学はいかにも見劣りしたのです。

図４　1960年代の教室棟（現豊橋キャンパス２号館）
中内康博氏撮影

ぼくは時習館でサッカー部だったけれど、その頃、愛大にもサッカー部があって、これが練習試合を時習館に申し込んできたのですが、愛大のグラウンドは時習館より整備が劣っていて、ユニホームもないような貧弱なものでした。ぼくらの方が圧倒的に強かったです。

**石田**　前身の東亜同文書院の時は、弁論部が内地の学校を回って宣伝をしていましたが、愛知大学もしていましたか。

**今泉**　ぼくも東亜同文書院大学記念センターをつくってから、豊橋中学の校友誌で、大正の頃にそういうことがあったという記録を見たことがあります。

昭和の初め頃の『蛍雪時代』とか受験雑誌で、帝大に並ぶような学校で、海外なら同文書院だなどと紹介されているけれど、ぼくの頃の愛大にそういうイメージはまったくありません。先生だけはすごいかもわからんけれど、校舎も学生も、はっきりいうと汚かったですよ。そんな風に地元から見られていました。だから、近辺の高校回りをして学生募集をしたようです。

中国についてはやはり評価されていました。名古屋大学の学生が週に２、３回中国語の授業を聴講しに来たりしていました。英語は南山大学が有名でしたけど、名古屋の私大文系というのは、今ほど学生の受け皿になるような学校が多くはなかったようです。

## ３．愛知大学中国研究会

今泉　入学したら中国研究会というものがあって、それに入るのが当たり前みたいになっていました。中国研究会の先輩が同文書院で行われていた中国語発音勉強会「念書」で指導する上級生の役割をしていました。

石田　私は東亜同文書院46期生で、旧制愛知大学では 1 期生でいらした井上方弘さんや間宮信夫さんにお目にかかったことがあります。

今泉　井上さんに、ぼくは指導してもらいましたよ。井上さんは、発音が非常によくて、まじめ、端正で、思想的には左じゃない方でした。銀行マンになったのじゃなかったかな。

それから、左の方だと、後に中国研究所で平野義太郎所長とやり合って活躍し、理事をした光岡玄さんがいます。かれが中国研究会の会長でした。この人は共産党の党員です。

いろんな人が中国研究会にはいましたけど、中国に対する親近感という点では一致していました。

石田　中国研究会というのは中国語の勉強会だったのでしょうか。

今泉　そのあたりが非常に微妙なんです。

中国研究会を作った先輩は、全員が同文書院から来た人たちなんですよ。同文書院は全寮制で上級生が下級生に中国語の指導をしていたから、研究会でも同じようにしたわけなんです。だから、中国研究会というのは、たんなる勉強会でもないし、だからといって思想だけというわけでもなくて、中国を中心に研究しようという集まりというか、あるいは中国に関する同好会のようなものでした。

中国研究会は、中国語をやるだけではなくて、今風にいえば日中友好のための活動もしていました。それは光岡さんが中心になっていました。

今、考えてみると日中友好協会の線と中国研究所の線があったと思います。中国研究所の線というのは、パンフレットみたいなものでした。日中友好協会の線では、パンフレットもありましたが、「三誌」を販売しました。「三誌」というのは、『人民画報』、『人民中国』日本語版、『北京週報』の三

つだったと思います。そういうのを買ったり、同級生に配ったりしました。

中国研究会に入って最初に受けた強い印象は、天安門に掲げてある毛沢東の肖像画です。あれが壁に貼ってありました。ぼくが入った昭和26年は1951年で、中国は1949年に中華人民共和国になっているでしょ、毛沢東、天安門そして新中国というイメージです。そういったものと同時に、昔の上海の飲み屋にあったような中国のきれいな姑娘（クーニャン）のポスターも貼ってありました。

だから、中国研究会は中国同好会みたいなもので、中国に対する思想的にどうのこうのなんていうのはなくて、中国語をやっていると上級生が教えてくれる、そのかれらがいる場所が中国研究会だったということです。

## ４．中国語の授業

石田　先生が受けた中国語の授業の様子をお聞かせください。

今泉　１年生で中国語をやったのはＥクラスといってましたが、50人未満です。そのうち、中研の会員になったのは十数人かな。４年生までずっと中国研究会のメンバーとして勉強したというのはとても少ないです。たぶん３、４人ですよ。その時の一学年の総数は300人ぐらいですかね。中国語をやったのは、その２割いったかどうかというくらいです。

あの頃は、中国語と英語以外でも、独、仏、露、どれでも12単位取れば第一外国語になったんですよ。第一外国語も第二外国語も全部12単位なんです。ぼくよりも上の世代には英語を全然やらなかったのは多いんです。ぼくの友達でも中国語とロシア語というのが何人もおりましたね。

そういう中で中国語をしっかりやろうと思う連中は、だいたい中国研究会に入って、研究会の先輩つまり同文書院から愛大に来た学生に指導してもらったのです。

ただ、人数的には新制の学生の方が多くなってきます。ぼくが入学した時の中国研究会の会長は旧制の光岡さんだったけれど、その次は新制の３年生が会長になりました。新制の熱心な先輩は、社会主義中国、新中国に賛同す

るという左の人が多かったですね。

ぼくは、普段は光岡さんに指導してもらい、時折、旧制 1 期の井上方弘（46期―東亜同文書院期別、以下同様）さんにもみてもらっていました。井上さんのような同文書院の大先輩は時たま研究会に来て、

「『華語萃編』を読んでみろ」

というんですよ。他にも鈴木択郎先生（15期、元東亜同文書院教授）の息子さんの康雄さんとか、卒業生の方も時々研究会に来られては、やはり、『華語萃編』を読んでみろ、といわれるのです。そのように中国研究会では、上級生が下級生を指導していました。

石田　その時の『華語萃編』は東亜同文書院で使われていたものですか。

今泉　同文書院のものではなく、愛知大学になってから印刷したものを使いました。旧制では鈴木先生がガリ版で印刷したものを使っていたそうです。ぼくらは謄写印刷したものを買いました。おそらく昭和24年、新制になってから印刷が始まったのだと思います。というのは、新制になって学生の人数が急激に増えて、中国語履修者も増えましたから、外部に謄写印刷を発注して本にするようになったのだと思いますね。

最初は『華語萃編』初集だけでした。ぼくが使った『華語萃編』二集は鈴木先生のガリ版でしたが、在学中か卒業以降かはわからないけど、二集も外注するようになりました。

石田　『華語萃編』の初集と二集を勉強したのですか。

今泉　そうです。三集と四集は見たことがなかったです。

1 年生の時は中国語を履修した全員が教えてもらうのだけれど、2 年生になると、中国語は第二外国語扱いというか、だんだん英語が中心になってきて、鈴木先生の授業を熱心に勉強する学生が少なくなってきます。1 年生の中国語担当の先生はみなさんやさしいのですけれど、2 年生の鈴木先生の授業はかなり厳しい。上級生からも、鈴木先生は怖いといわれていました。

石田　1 年生の中国語担当の先生はどのような方がいらしたのですか。

今泉　金丸一夫先生（40期）と桑島信一先生（29期）のおふたりでした。金丸先生が 3 コマ、桑島先生が 1 コマだったかな。

石田　お二方とも東亜同文書院出身者ですね。

今泉　そうだね。われわれの頃の中国語は、鈴木、桑島、金丸、池上先生（貞一、40期、元東亜同文書院大学講師）の４人です。鈴木先生と池上先生は１年生の授業はもっていませんでした。

石田　『華語萃編』初集は、愛知大学でも東亜同文書院と同じように１年生ですべて終えてしまうのですか。

今泉　ぼくの時は、１年ですべてやったと思うけれど、丹念にやるというよりも、かなり飛ばし気味にやったところもあるかな。ただ、断言はできません。あるいは、１年生から２年生にかけて初集を使いつつ、ぼくのような文学部の中文（中国文学）専攻の学生は鈴木先生の授業で並行して二集を勉強したのだったかもしれない。

ぼくは３期生なのだけれど、実質的に最初の中文専攻の卒業生なの。中文っていっても学年で１人おるかおらんかですよ。新制の１期生で１人いたけれど、書誌学で有名な法政大学の長沢規矩也先生の授業に１回も出なかったので落第してぼくと同じになった。２期生の人は蒲郡の人で、そういえば２人ともお坊さんなんだけど、仕事が忙しくて落第してしまったから、３期の時に初めて卒業生が出たのです。

石田　初集にくらべて二集はかなり難しいように思いますが、どうでしたか。

今泉　２年に上がると後輩が２人入ってきましたが、２年生の授業には出られないので、ぼくひとりで二集の授業を受けました。二集は半分ぐらいやりましたね。

石田　辞書はどのようなものをお使いになったのですか。

今泉　井上翠のです。旺文社のもあった。ただ、辞書は役に立たなかったですね。そもそも、辞書を引いて勉強というよりも、先生がいうことを必死に書くことで終わりましたね。文章の難度はあまり関係なくて、１年生の時に魯迅の作品を原文で読んでいました。辞書を引いてなんていうよりも、わかるところはわかって、わからんところはそのまま放っておきましたね。

３年、４年になると、講読の授業で『紅楼夢』とか『三国演義』とかをやりました。文学部の専攻の語学の授業は、もうそれこそ先生と１対１、下級

生が来ても 1 対 2 か 3 ぐらいです。

石田　『紅楼夢』などを読むための工具書は図書館に揃っていたのでしょうか。

今泉　あったと思いますよ。だけど、図書館へ行って辞書などで調べるなんていうことをぼくはやりませんでしたね。図書館に行ったら、やっぱり作品の方を見たんじゃないかな。

『紅楼夢』なんていうのは、ぼくではまったく歯が立ちませんでしたから、先生がいわれることを、そうかと思って聞いていました。

石田　『紅楼夢』や『三国演義』も、『華語萃編』と同じスタイルで読んだのですか。

今泉　そうです。最初に先生が読んでくれて、その後に自分で朗読します。内容というよりも発音を勉強する風でした。

石田　東亜同文書院は、中国語音を最終的には注音字母で教えていましたけれど、先生の時も同じですか。

今泉　そうです。発音を調べるだけで大変で、あまり意味はやらなかったですね。発音辞典がぼろぼろになるくらいやりましたよ。

発音辞典は、薄っぺらいのが 2 種類出ていました。みんな、そういうのを使ったと思いますよ。外国語大学なんかでも、辞典で意味を調べることは、あまりなかったんじゃないですかね。文学をやるのに辞書なんていうのは、ぼくはあまり考えなかったな。言葉としてよりも、漢字が難しいというのが最初にきちゃったから。そうやって、現代語の特徴みたいなものを、これは本当に細かなことをやりましたからね。例えば「了」のいろいろな働きとか、かなり語学的にやりましたね。

石田　『紅楼夢』など講読の授業は誰がされていたのですか。

今泉　鈴木先生ですよ。だけど、1 年間で第 1 回を読んだくらいだったかな。あの時はおもしろいとは思いませんでした。おもしろいと思ったのは、卒業してから桑島先生がご自宅で勉強会をやってくださってからです。

それから、張禄沢先生が愛大に来られると、ぼくと中文の学生 2、3 人に老舎を読んでくれるということなった。

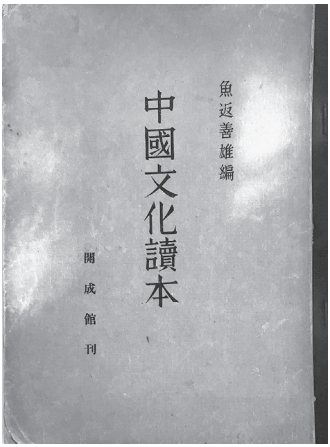


図 5　魚返善雄『中国文化読本』（開成館、1948年）

**石田**　現代小説も勉強したのですか。

**今泉**　ええ、やりましたね。『阿Q正伝』とか、いろんな作家の作品を収めたアンソロジーを使いました。

**石田**　東京外語大学など同文書院以外の中国語教科書はお使いになりましたか。

**今泉**　あんまり使わなかったな。鈴木先生が、そういうのを選ばなかったです。ただ、同文書院で勉強した後に東大で中国語の先生をした人のものは使いました。

**石田**　魚返善雄さんでしょうか。

**今泉**　そうです。魚返さんの『中国文化読本』は 3 年生で使ったのかな。商業通信文もやりましたけど、同文書院の教科書をガリ版で刷ったものでした。そういうのをやったのは中文だけですよ。

**石田**　東亜同文書院では福田勝蔵先生（20期、元東亜同文書院大学予科教授）がビジネス文書の教材を作っていましたが、福田先生は愛知大学にいらしたことがあるのですか。

**今泉**　いや、福田先生は GHQ に止められて愛大に来ることができず、名古屋学院大学に行かれました。だから、福田先生の作られたものを、鈴木先生が抜粋されたんです。

中文では、文学も、語学も、ぼくは鈴木先生に教えてもらいました。

**石田**　2 年生以上の中文は、鈴木先生おひとりで教えられていたのですか。

**今泉**　ぼくの場合は、ほとんど鈴木先生ですね。桑島先生は文学部の方では授業を持たれていなかったですよ。古文講読はいわゆる漢文で、若山尚先生（元朝鮮総督府師範学校教授）が担当された。

中国文学専攻の授業は、学生がだいたい 1 人か 2 人で、多くても 3 人です。中文専攻の語学授業で10人なんていうのは、ずっとなかったですよ。ぼくが教員になってからも、相当後になるまではなかったです。

石田　戦後、神戸市外国語大学へ行かれた坂本一郎先生（20期、元東亜同文書院大学教授）は、『人民日報』を朗読して書き取りをさせていたそうです[2)]。愛知大学でも『人民日報』を教材にしていましたか。

今泉　『人民日報』は桑島先生がガリ版で使っていたことがありました。ただ、音声の方、耳で聞くというのは少なかったですね。

昭和30年（1955）、内山雅夫先生（正夫とも。34期、元東亜同文書院大学予科教授）が来られるんだけど、先生は音声面のことに積極的で、テープレコーダーを取り入れていた。あの頃のテープレコーダーはとても大きいものでした。東京芝浦電気の製品で、内山先生はメカに強くて、張禄沢先生の朗読を吹き込んで、それを授業の時に流していました。

石田　東亜同文書院の中国語の試験問題を見ると、普通の聞き取りのほかに、聞いた中国語を日本語に訳して書く、聞いた日本語を中国語に訳して書く、というのがあったようです。愛知大学でも、同じように行われていましたか。

今泉　「聴写」（聞き取り）は鈴木先生もやられたし、金丸先生もやられました。ただ、日本語を中国語に訳すというのは、鈴木先生はやられてなかったです。１年生の時は先生がいう中国語を、そのまま書き取るというのが主です。それから、中国語で質問を出し、学生が答えを中国語で書くというのもやりました。

「今天星期幾？」

と、問われたら、

「星期三」

とやる程度のは易しいけれど難しいのもありました。試験は、それだったんですよ。内山先生は、それに加味されて、聞き取りに録音を使っておられました。

石田　当時の学生は音声機材など持っていませんし、聞き取りはとても難し

---

２）佐藤晴彦「飲水思源：中国語教育の開拓者⑤：坂本一郎 (1)」『中国語の環』82、日本中国検定協会、2009年、５頁。

かったのではないかと想像します。

**今泉**　それもあって、内山先生は、しょっちゅうスピーカーを持って授業に行かれてやっていましたね。

けれども、鈴木先生も、教員になってからはぼくも、内山先生以外の教員は、スピーカー教育に対して懐疑的だったんです。鈴木先生は、あからさまにいったことがありますよ。

「内山君、なんであれを使うんだ。口でいえばいいじゃないか」

内山先生は、喉が何とかと弁解されていました。ちょっと声がかれ気味な方だったんですけどね。とにかく、内山先生はスピーカーを流してやっていました。先生以外は、教員になってからのぼくも含めてみんなメカに弱かったので、肉声でやりました。

そういえば、桑島先生は『人民日報』をやりましたけど、鈴木先生は『大公報』みたいな、もっと古いものをやりました。中国語学講読という授業で、文語の翻訳をしました。それをやったのは、ぼくと、ぼくより後の数人ぐらいで、それ以降の鈴木先生の講読授業がどういうものだったのかは、よく知らないです。伊賀太吉さん（新制愛知大学11期、1962年卒、前豊橋地区日中友好協会会長）とか、草場明子さん（新制愛知大学16期、1967年卒、元愛知大学中日大辞典編纂処勤務）とか、ああいう方たちの時はどうされていたのかな。

図6　旧愛知大学本館（現豊橋キャンパス・東亜同文書院大学記念センター）　2017年12月7日撮影

ぼくの印象では、鈴木先生は「重念」[3]なんかをとても厳しく指導されていました。まあ、ぼくの場合は2年生以上の中国語授業が鈴木先生と1対1とか1対3

3）重念。重読のこと。中国語における文アクセントを意味する。

図７　旧鈴木択郎執務室（現豊橋キャンパス・東亜同文書院大学記念センター）2017年12月７日撮影

ぐらいでやったので特別だったのかもしれないですけどね。

ちょうど、ここだったです[4)]。２階の本間喜一[5)]学長の学長室の西隣が小岩井浄法経学部長（愛知大学第３代学長）の部屋でした。それならば、もう片方の東隣の部屋は、その次に偉い文学部長室になりそうなものなのだけれども、鈴木択郎先生の部屋になっていました。お二人は本間先生の両腕のような存在だったのですよ。本間先生は、同文書院と中国語を重視されておった。それから、鈴木先生の人柄もね。だから学長室の隣なんですよ。

鈴木先生は、誠実な人柄だったから、本間先生のよき話し相手だったと思う。経営の才能があったとかいうんじゃないと思うけれど、非常に誠実で、とても信頼されていたんじゃないですかね。

石田　鈴木先生の授業の様子をうかがうと、常に発音が中心だったようですね。

今泉　ええ。ぼくらの同班四十何人は、４月に入って５月までには注音字母を覚えました。ウェード式も同時にやりました。ピンインはもうちょっと後になります。横書きになってからは、徹底してピンインになりました。

石田　先ほど、先生のお宅に下宿していた学生が中国語をしゃべっていたこ

---

４）聞き取り場所は東亜同文書院大学記念センター。1908年第15師団司令部庁舎として建てられた。木造二階建て。1946–1996年愛知大学本館。1998年登録有形文化財登録。

５）本間喜一（1891–1987）、愛知大学名誉学長、同大第２・４代学長、元東亜同文書院大学学長。敗戦によって東亜同文書院大学が消滅すると、外地にあった高等教育機関の学生や教員の教育・研究活動の継続と日本復興へ向けた新たな国際的教育活動を目指し愛知大学設立を主導した。

とをうかがいました。それで思い出したのですが、同文書院から愛大に来られた井上方弘さんにお話をおうかがいした際、『華語萃編』なら「カゴスイヘン」とはいわずに、「Huáyǔ cuìbiān」というように、中国関係のことばはすべて中国語読みされていました。

今泉　それは、こういうことですよ。

「名前を呼ぶのは、なんでも中国語音でいいなさい。とにかく漢字が出たら中国語の発音に置き換えなさい」

「外へ出ていて、漢字の看板があったら全部中国語音でいってみなさい」

これはもう徹底していわれました。

だから、さっきいったように発音辞典というのがよかったのですよ。漢字があったら中国音にするということです。これは同文書院のやり方だったのではないですかね。

発音辞典はみんな買いました。学校で買わされました。

石田　東亜同文書院生の回想の文章にも、坂本先生のことを「ㄅㄢˇ ㄅㄣˇ」（Bǎnběn）と中国語読みしていたというようなことが出てきていたと思います。

今泉　ぼくらもそうでした。上級生が、

「ㄌㄧㄥˊ ㄇㄨˋ」（Língmù 鈴木）

「ㄙㄤ ㄉㄠˇ」（Sāngdǎo 桑島）

と中国語の音でいっているでしょ、だから、鈴木先生や桑島先生のことを「先生」をつけずにいっていたんです。光岡さんのことだって、「ㄍㄨㄤ ㄍㄤ」（Guānggāng）とかいったりして、中国語というのは、そういうもので、敬称はつけなくてもいいのかなと思って。

そしたら、いわれましたよ、

「それは、きちんと“ㄒㄧㄢ ㄕㄥ”（先生）とか、“さん”とつけなさい」

とね。そのことを思い出します。

## ５．愛知大学で行われた東亜同文書院式中国語教育

今泉　ぼくが学生の時の愛大に中国人はいませんでした。

愛知大学は、昭和30年（1955）に張禄沢先生がいらっしゃるまでは常勤の中国人講師はいませんでした。ぼくの学生時代、１学期だけ新城の比較的若い中国人が講師をされました。

石田　新城に中国人の先生がいらしたのですか。

今泉　何でおられたのかわかりません。

中国人の講師を呼ぶというのは、１年生の時も、２年生の時も１、2回ありましたね。ぼくが教員になってから、鈴木先生に、どのように中国人の講師を呼んでいたのですか、と尋ねたら、

「このあたりに中国人はほとんど住んでいなかった。旧制の頃は、豊橋駅前のダンスホール『上海』の経営者の上海人、同じ駅前にあった中華料理屋『天華』に台湾人がいたくらいだった」

とおっしゃった。

だから、日中教員ペアの授業という同文書院のスタイルは、ぼくが卒業して張先生が来られてから復活したんですね。在学中、ぼくは中国人と会ったということはほとんどなかったです。ぼくは全国華語弁論大会に２回出たのだけれど、その審査員に中国人の先生がおられたとかね。だいたい東京か、関西の学校の講師でした。まだラジオを録音したり、テレビを録画したりなんてできなかったですから、ほかは『白毛女』とか映画だけです。だから、中国人の肉声で中国語を聞くというのは本当になかったです。

そうしてみると、愛知大学の中国語教育というのは、張先生がいらっしゃった昭和30年から昭和40年（1965）ぐらいまで同文書院と同じようにやれていたのだと思います。

## ６．『中日大辞典』編纂へ

石田　おうかがいしてきた中国語学習から、どのように『中日大辞典』編纂

にたずさわるようになられたのでしょうか。

今泉　4年になった時に、同文書院の辞典カードが返ってくるということを鈴木先生から聞きました。

鈴木先生は、さっきいった1対1ぐらいの授業で、ぼくが中国語を熱心にやっていると認められて、話し相手になると思ってくれたのですかね。4年生の春になった時に、

「君は就職をどう考えているのか」

といわれて、どこかへ勤めなくちゃならないが、中国語はおもしろいのでやりたいです、という話はしたんです。

ぼくは3月頃に新聞社の試験を受けに行ったし、名古屋のテレビ局にも行きました。民放のテレビ局が開局して間もない頃でした。書類審査や筆記試験をやったと思うけど3回目ぐらいで本社に呼ばれたんです。記者とか、アナウンサーとか選べというので、なにも知らないのにかっこいいと思ったんでしょうね、ぼくはアナウンサーに丸をつけたんですよ。男女合わせて5、6人ぐらい残っていて、そしたら、

「今から放送してもらいます」

といわれました。6枚ぐらいの写真から1枚を選び、それについて放送してもらうといわれて困っちゃってね。引揚列車みたいな写真を選びました。原稿なしの実況放送みたいなものです。愛大の先輩が、豊橋駅で引揚者にお茶を出して接待する活動をしておったから、それを思い出してやりましたけど、

「はい、ありがとう」

といわれてだめだったです。

新聞社の就職もだめだったです。

それで6月になったら、教員試験があったので受けました。そしたら、ものの見事にだめだった。後で聞いたら、あの頃、愛大を出て教員になるなんていうのは難しいなんてものじゃなかったそうです。

石田　愛大事件での左翼のイメージの影響でしょうか。

今泉　愛大事件が昭和27年（1952）で2年生の時です。上級生たちが愛大

事件の関係で逮捕されました。あの時、光岡さんは、たまたま郷里に帰っていました。でも、党の連中はみんな地下に潜ってしまって、それで、まだ 3 年なのにぼくが中国研究会の会長に選ばれてしまうんです。そしたら、豊橋の公安警察だかの刑事が、自宅にあいさつしに来て、家族みんなびっくりしてしまいましたよ。

「中国研究会の会長さんになっておめでとう」

といわれて、よく知ってるなと思いつつ呆気にとられました。

中学以来の友達が共産党にいたけど、ぼくはその外にいた人間で訓練されていないから、その世界の事情に疎かったんですよ。

刑事に来た理由を尋ねたら、

「中国研究会は、愛知大学では非常に有力な組織なんで、こうやってお邪魔して親しくしてもらっているんです」

というんだ。

後で思い出したのが、熱心に中国語を教えてくれたひとつ上の先輩が銀行に就職した時、

「銀行を受ける時に中国語をやったということは伏せないかん」

と注意してきたことです。やはり愛大の中国語は左のイメージがあったのですね。

夏休みの直前に高校の教員を募集していると知って、これはいいと思ったのだけれど、問い合わせてみると、現役の先生の場所替えのための補欠みたいなものだから新卒はだめだといわれました。それでもあきらめられずに県の教育委員会に行ったら、

「愛大なら脇坂雄治先生の推薦状をもらってきなさい」

といわれたんです。

脇坂先生というのは（愛知大学第 5 代）学長になった方です。なんで脇坂先生なのかわからなかったけど、就職課に相談したら、脇坂先生が裁判官だった頃にある裁判を非常に公正に裁いたということで県の教育長に尊敬されていて、その推薦があれば、どこでも通るくらい信頼のある人だ、というんだ。

ただ、ぼくは面識がなかったから、鈴木先生に相談しましたよ。鈴木先生と脇坂先生が親しかったのです。鈴木先生が頼んでくれて、脇坂先生は鈴木先生がいわれるんだったら、ということで推薦状を書いてくれました。それを持って教育長のところへ行ったんですが、結局、その年は新卒のポスト自体がもうなくて、どうしようもないということだったのです。それで脇坂先生が推薦したのにだめだったという滅多にないことになってしまいました。脇坂先生に、だめでした、と報告したら、

「しょうがない」

といわれたから、あるいは規定を破るような横車は通るはずがないということを知っていて推薦状だけ出してくれたのかもしれません。

秋口かな、来年の春に辞典のカードが日中友好協会を通して返ってくるということになりました。それで鈴木先生は、

「辞書編纂には実際に作業する人員が必要だ。中国語をやる人が要る」

とぼくに声をかけてくれたんですよ。

11月に事務局長から嘱託職員として採用する確約をもらい、ぼくは1年間愛大事務職員になったのです。

石田　戦前、東亜同文書院に留学した豊橋浄円寺住職藤井草宣[6]さんのご子息宣丸さんと先生は同僚だったとうかがったことがあります。

今泉　かれとは中学が一緒だった。かれは大谷大学です。お父さんの関係もあったし、愛大では同じ副手、助手だったこともあって親しくしていました。

東洋史に鈴木中正という先生がいて、その方は東大の史学出身なんだけど、藤井君は大谷大学の学長をされた野上俊静門下なんですよね。当時、文学部には東洋史と中国文学、仏文学に各1名の副手がいたんですよ。

石田　副手というのは、どのようなものなのでしょうか。

今泉　愛大の副手というは、無給の研究職です。1年目の実績次第で、もう1年延長して2年間までというものです。愛大の文学部は大学院がなかったから、学部を出たけれど研究室に残りたい人を副手という形で採用したんで

6）藤井静宣、号草宣（1896–1971）、愛知大学短期大学部教授。

す。２年目からは有給になって、仏文がぼくの卒業の年に１人、中文が次の年に１人、それから東洋史で１人を採るということになっていたそうです。

ぼくは卒業と同時に辞典編纂処が開設されたから、１年間は辞典編纂処の嘱託職員として給料をもらったんです。翌年中国文学の副手になり、藤井君は東洋史の副手で一緒になったんですよ。藤井君とは中学、高校が一緒で大学は違ったのだけれど、副手でまた一緒になったわけだ。

ただ、その後、かれは副手をやめて浄円寺を継ぎました。

石田　宣丸さんから、草宣さんの東亜同文書院留学の話を聞いたことはありますか。

今泉　あったよ。藤井草宣さんは、同文書院が上海から引き揚げてきて、豊橋に愛大ができる時に積極的に応援してくれていました。払い下げだとか、基金の呼びかけや学生募集とか、陰に日なたにバックアップしてくれた。豊橋の文化人グループの筆頭にいましたからね。

ただ、小岩井浄先生の奥さん多嘉子さんと考えが違っていたんです。

戦前、藤井さんは上海別院で活動していたのですが、別院は戦災孤児のための養護施設を運営していた。その頃、多嘉子さんも上海で孤児の救済活動をしていたのですが、くわしくは知りませんけど、何かしら軍との関係があったようで、それを藤井さんは批判的に見ておったようです。軍が人を殺しているのに、その関係者が孤児をどうのこうのするっていうのはおかしいじゃないか、という考えがあったようにぼくは思っています。

小岩井夫人というのは、癖があるというか、毀誉褒貶のある人だったですよ。合わなかったのでしょうね、藤井さんはだんだんと愛大から手を引いてしまうんですよ。特に本間学長が最高裁の事務総長となって愛大を留守にし、小岩井先生が学長になると、藤井さんは完全に愛大から手を引いてしまうんです。

そうはいっても、藤井さんと鈴木択郎先生との関係は、学生と先生です。藤井さんは同文書院の聴講生として中国語を学んだのですからね。そういう点では、鈴木先生とは非常に親しかったんです。

だから、鈴木先生のお葬式も、草宣さんはお亡くなりになっていたけど、

宣丸さんの浄円寺でやりましたよ。内山先生も、九州の人なので、こちらに所縁のあるお寺さんもないから、そこでお葬式をしましたよ。そこでお葬式をあげた愛大関係者は結構いました。

図８　旧中日大辞典編纂処（現豊橋キャンパス・教職員組合事務所）　2017年12月７日撮影

石田　話を辞書に戻すと、先生は卒業と同時に辞典編纂にかかわるようになられたのですね。

今泉　ぼくが４年生の昭和29年（1954）12月にはカードがここに来ました。いまの教職員組合の事務所のところが辞典編纂処です。

石田　では、在学中に辞典編纂の作業を始められたのですか。

今泉　そう。その年の夏ごろ、本間先生と鈴木先生たちがカードの交渉をやっていたんです。東京に行くか、それとも豊橋の愛知大学に来るか、という引っ張り合いみたいなことをです。

東京は、熊野正平先生（16期、一橋大学教授、元東亜同文書院教授）が同文書院の同窓会滬友会をバックにして引っ張る。こっちは、本間先生、鈴木先生が引っ張る。結果的には、同文書院で華日辞典編纂をもともとやっておられた内山雅夫先生と欧陽可亮先生を呼ぶならいいだろう、ということで愛大になったのです。

中心となるスタッフは、同文書院から来た鈴木先生、内山先生、欧陽先生です。ただ、欧陽先生は当時台湾におられて、すぐには出国できないというので当面は奥さんの張禄沢先生が来られました。同文書院から愛大に来た先生には、桑島先生、池上先生、金丸先生、その他数名みえましたが、金丸先生は愛大事件にかかわって逮捕され、それで愛大をお辞めになっています。後に、本間先生の推薦で千葉商科大学に入りました。

こうして辞書編纂にぼくも加わるようになったのです。同文書院の華日辞

典カードが愛知大学に来たので、結果的にぼくは一生これにたずさわることになりました。

石田　今日はありがとうございました。

（2016年10月13日聞き取り）

参考文献

愛知大学五十年史編纂委員会編（1997–2000）『愛知大学五十年史』資料編、通史編、愛知大学

愛知大学で中国（語）を学んだ卒業生の会編（1974）『愛知大学で中国（語）を学んだ卒業生の名簿』私家版

石田卓生　Ishida Takuo　愛知大学非常勤講師　専門：近現代日中関係史、中国語教育史、近現代中国文学